

ペットと暮らすシニア世代のあなたを支援する情報誌

# わんにゃお

Wan! Nyao! Press



# 通信

vol.4 2021.夏

さよならのあとで

愛するペットを喪ったあなたに...

特集



オバマ元アメリカ大統領がホワイトハウス時代から飼っていた、愛犬ボウが亡くなった、と先日彼のSNSに書かれていた。オバマ氏は初めての黒人系大統領で、2人の娘さんのパパ。大統領選に当選したら犬を飼う、という公約を娘と交わしていたらしく、大統領勝利宣言ライブで「娘たちよ、応援ありがとう。約束どおり犬を飼おう」と言ったのは有名だ。

その後、ポルトガル・ウォータードッグ(Portuguese Water Dog)というブリードを知人から譲り受け、晴れてボウは、ホワイトハウスの犬になった。

あれから10年以上の月日がたち、オバマ氏のコメントにはボウの最期のことは書かれていない。ただボウへの感謝と、ボウとの時間がどれだけ貴重だったかと思ひ綴られていた。

(以下抜粋)

ボウは私たちに、いつもやさしく寄り添ってくれた。

いいことがあった日も、悪かった日も、いつもハッピーに迎えてくれた。

ホワイトハウスで起こったいろんなハプニングに、辛抱強く耐えてくれた。

大きな声で吠え、でも決して人を噛むことはなかった。

(中略)ボウは、私たち家族がまさに必要としていた犬で、そして期待以上の犬だった

私は獣医師として、数えきれないほど多くの動物の最期の見送りをお手伝いしてきた。

そして、最愛の動物が去った後、実に多くの方が、別れ方につ

いて後悔する。

あの時、入院させればよかった、させなければよかった。

あの時、あの薬を使えばよかった、使わなければよかった。あの時ついてあげられなかった。

そして、ちゃんと看取らなかった自分を責める。

お別れの後の寂しさや辛さ、悲しさは自然なことで、そして時とともに、それは癒されるものだろう。

私ははっきりと言いたい。動物の一生の中で、最期の短い時間をどう過ごし、どういう看取り方をしたかなんて、実はたいしたことではないのだ。

大切なのは、犬や猫がわが家に来たあの日から、長い時間をどう一緒に過ごしたかということ。

一緒に暮らし、遊び、笑い、歩き、一緒に寝て、撫でて、舐められて、一緒に癒された、長い時間。

大切なのは、どう死んだではなく、どう生きたか、なのだ。

老子曰く。

もしあなたが落ち込んでいるのなら、あなたは過去を生きている。

もし不安ならば、未来を生きている。

もしあなたが心穏やかならば、今を生きている。

例えば、自分の年齢を考えて、もう動物は飼わないと決めることもあるだろう。それはりっぱな決断だけど、動物を飼えない自分を悔みに思うあなたは、未来しか見ていない。

現在、今、あなたができる動物との関わりはきっとあるはず。

愛護団体でボランティアしてもいい。近所の忙しい方の代わりに、犬のお散歩を代行してもいい。定期的に譲渡会のお手伝いしてもいい。

もちろん、無理に何もしなくてもいい。昔の写真を見て過ごしてもいい。

今、自分が心穏やかに過ごすように、今を見つめてほしい。

今の自分の心が充実するあなたを見て、先に逝った動物たちは、今のあなたを、きっと誇らしく思うに違いない。



獣医師・シエルターメディスン 西山 ゆう子 さん

(にしやま・ゆうこ) 北海道札幌市生まれ。在米30年。ロスアンゼルス在住。現役臨床獣医師。シエルターメディスン、獣医法医学、動物愛護、動物虐待、獣医療訴訟、ターミナルケアに携わる。

1986年 北海道大学獣医学部卒。東京と北海道の動物病院に勤務後、米国ロスアンゼルスに移住。米国獣医師免許取得。勤務医を経て、カルフォルニアガーディナ市に開業。2000年から2010年まで、全米のTNR活動の先駆者である愛護団体、Best Friendsが行うCat Nipper TNRのロスアンゼルス地区プロジェクトに専属獣医師として不妊去勢手術活動に参加。2014年に同病院を後輩に譲り、フリーの獣医師として独立。3か月に1度のペースで日本に飛び、講演会、勉強会など動物愛護活動を続ける。2017年神奈川県動物愛護協会賞受賞。2018年、University of Florida, Collages of Medicione and Veterinary Medicineの獣医法医学認定コースを修了。

主な著書「小さな命を救いたい!」(エフエー出版)、「セイン・グッバイ」(駒草出版)「いい獣医さんに出会いたい」(ポット出版プラス)他多数。

©西山ゆう子さんのブログ <https://yukonishiyama.com/>